

イノベーションを糧に新たな価値を創造 未来志向の創生が育む持続可能なまち！

観光振興で交流人口の拡大を図る

とにかく広い。そして広大な市域の中に全国区レベルの観光資源（地域資源・地域財産）が、絶妙なバランスで配置されている。

平成17年9月20日、旧仙北郡田沢湖町・角館町・西木村の2町1村による合併で誕生した仙北市の地図を広げるとき、それは誰もが思う実感ではないだろうか。

面積約1100㎢は東京都の半分強。広大な都市の多い秋田県内では由利本荘市、北秋田市に次ぐ3番目の面積で、全国792市中18位に相当する。

観光資源は中央やや下部に位置する田沢湖（最大水深約423mは日本一）を扇の要とすれば、最北部には十和田八幡平国立公園に属する八幡平、単一の湧出口における強酸性湯の湧出量日本一を誇る湯治場・玉川温泉がある。

また市域東部には、北日本随一の高山植物

の宝庫・秋田駒ヶ岳が鎮座。その北方には全国温泉ファン憧れの地とされる秘湯・乳頭温泉郷が、乳頭温泉郷と田沢湖の間には田沢湖高原温泉郷と水沢温泉郷がそれぞれある。これらの温泉群と前出の玉川温泉を合わせれば、仙北市内には10種に大別される温泉泉質のうち8種がそろう。

さらに市域南部には、全国でも有数の規模を誇る武家屋敷（重要伝統的建造物群保存地区）を有し、外国人観光客にも大人気の小京都・角館（角館地区）がある。田沢湖に面し、溪流（ひのきないがわ 松木内川）の里、栗の名産地として知られる市域西部・西木地区の栗林には、国内最大級のカタクリ群生地も見られる。

それだけではない。豊かな自然環境と伝統・文化が同居し、農林業が盛んな仙北市は「食の宝庫」でもある。

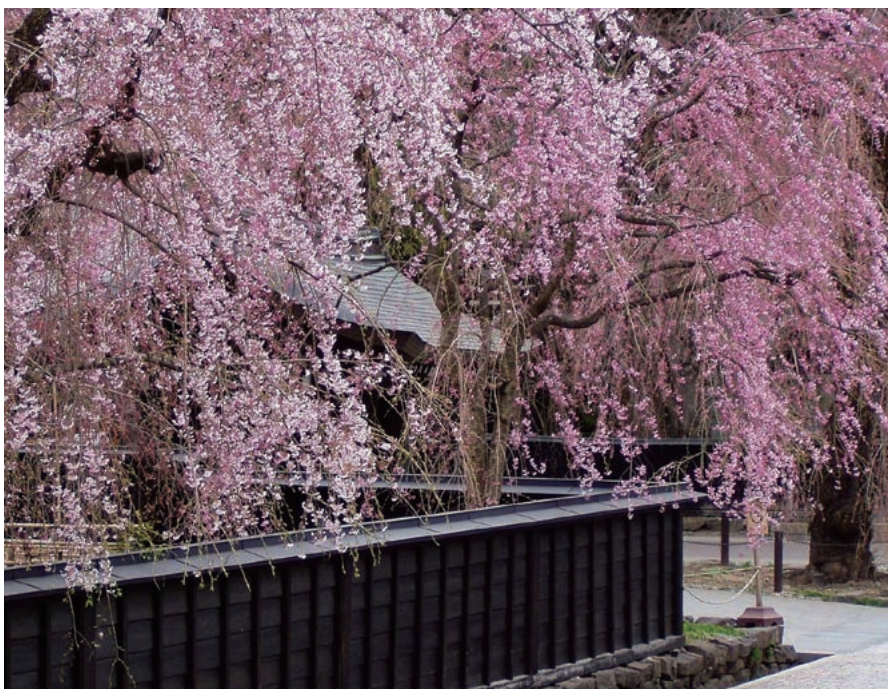
このように多彩な観光資源・地域財産を有する仙北市の観光入込客数は、観光県・秋田の中でも県都・秋田市に次ぐ年間500万人

かどわきみつひろ
門脇光浩
仙北市長



以上をコンスタントに記録（東日本大震災以前のピーク時は約600万人）。仙北市には毎年、人口（約2万6000人）の200倍近い数の観光客が訪れていることになる。

「観光は仙北市のまさに基幹産業です。しかし、東日本大震災以降は観光入込客数も伸び悩み気味で、これをゆくゆくは、1000万人にまで持っていきたいというのが私たちの目標です。現実問題としては、震災前のピー



四季折々の風情が人気を集める角館地区(武家屋敷群)

ク時だった600万人台に追い付き追い越すことが先決で、来年度中にはまず600万人に持っていきたい。

特に東日本大震災以降、大きく落ち込んでいる宿泊客数を、新たな魅力の創出によって、単に回復するだけでなく、どんどん増やしていきたいですね。ひいてはその延長線上でコアなファンをつかみ、それを移住・定住の促進へもつないでいきたい。しかし、なかなかそう簡単には、問屋が卸さないでしょう



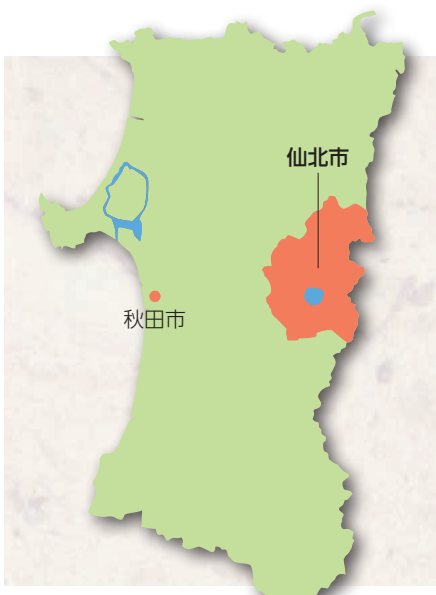
江戸時代の面影を伝える角館地区の商人地区(外町)

けどね」

そう言って豪快に笑う門脇光浩仙北市長は現在3期目。市長就任から今年でちょうど10年目を迎える。

地域の広大さに比べ、元々の人口の母数が少ない仙北市にとって、基幹産業である観光の振興による交流人口および関係人口の増大は、もう一つの基幹産業である農林業の振興とともに、持続可能なまちづくりには不可欠の基盤となる。

「人口に関してはランキングを下から数えた方が早い状態にあります。そこを前提に、少子高齢化や人口減少が止まらない現状を少しでも変えていくには、市内外の子育て世代や働き盛り世代に魅力を感じていただけるようなまちづくりを、とにかく継続して進めていく以外に方法はありません。子育て世代・



それ以後、地方創生に関する仙北市の「全国発信の質量」は、各界からの注目を集め続けている。その象徴は今年2月27日に市役所庁舎(田沢湖庁舎)の玄関に掲げられた《仙北市特区推進共同事務局》の看板だ。内閣府と

未来投資型事業と地道な都市運営

働き盛り世代の市民には『このまちですと暮らしたい』と欲していただけのようなまちづくりを、市外の子育て世代・働き盛りの世代の方たちには『このまちで暮らしてみたい』と思っただけのようなまちづくりを心掛けるとともに、そのための発信を常にしていかなければならない。それが私たちのミッションです」(門脇市長)

そんな危機感を「何でもやってやろう」の意気込みに変えて、国家戦略特区の公募に手を挙げ、仙北市が第2次選定(地方創生特区)を受けたのは平成27年8月のことだった。



数ある紅葉の名所のなかでも有名な抱返溪谷(だきがえりけいこく)

区)をはじめ、さまざまな分野の事業があり、それぞれに規制緩和を活用させていただきながら、推進しています。

その流れの延長線上ともいえるべき取り組みとして、昨年6月には国連で採択された持続可能な開発目標《SDGs》の達成に向けた取り組みへの提案を行い、全国29の《SDGs未来都市》の一つにも選定されました(門脇市長)

そして今年――。新天皇陛下が即位され、5月1日からは元号が平成から令和へと改まった。内閣府との連携による《仙北市特区推進共同事務局》は、そのわずか2カ月ほど前に設置された。まさに令和の始まりとともに、近未来に向けた仙北市の持続可能なまちづくりは新たな推進力を得たわけだが、こうした「追い風」を十分に受けつつも「逆にこれからは正念場」と門脇市長は表情を引き締める。

「グローバルイノベーションのモデル地区の構築を図るため」に国家戦略特区(地方創生特区)および近未来技術実証特区などへの取り組みに果敢に舵を切った仙北市にとって、それを基盤に持続可能なまちづくりを実現するには、もちろん不転の覚悟での取り組みが継続されなければならない。しかし後に述べるように、民間企業が参画しての事業化も進みつつあるとはいえず、実証実験の枠を大きく超えるに至っていないケースの方が、現状ではまだ多い。

当然、その前に、市民の暮らしの充実化に



農薬散布はドローンの有効な活用策の一つ

向けた各種事業・施策、市政運営上の懸案になっている各種事業・施策の推進など、「待ったなし」で取り組むべき事業・施策の数々も山積している。

「例えば令和元年度の当初予算編成の際にも、財源の確保には本当に苦労しました。令和2年12月に開庁予定の新角館庁舎の建設工事や総合給食センターの整備、各庁舎の耐震補強事業などのほか、小中学校施設の補修、水道未普及地の解消事業、災害対策や道路補修事業などにも力を傾注しなければなりません。さらに福祉医療費、子育て支援、病院事業や市民の健康増進事業など、都市運営に不可欠な各種の事業を着実に進めながら、一方で国家戦略特区など将来に向けての投資も不可欠からです。

仙北市が共同で設立した特区推進共同事務局は、国家戦略特区に選定されている全国10カ所の地域の中でも、東京、兵庫県養父市に次いで、全国3番目の事例となる。

「私たちの提案としては、例えば農業生産法人による休耕田の活用や6次産業化の推進、農家民宿と田沢湖・玉川温泉の存在を組み合わせた医療・農林ツーリズムの推進、市域の実に60%(山林の70%)を占める国有林野の貸付面積拡大による利用促進、無人自動飛行機(ドローン)や無人バスなどの先端技術を生かした各種事業の推進(近未来技術実証特



湧出量日本一の強酸性湯・玉川温泉は温泉療養の拠点



北日本随一の高山植物の宝庫・秋田駒ヶ岳



昭和48年まで使用されていた分校「思い出の湯分校」(一般公開)

そのため、歳入が伸び悩む状況下にあつて、逆に今年度の一般会計予算は過去最高額となりました。

公共事業の平準化や市有財産の整理、事業の各種見直しなど歳出面での改善努力にも、もちろん力を尽くさねばなりません。その上でなお、市民の皆さまのご理解をいただきながら、まちを元気にする事業、さまざまな追い風を活用した未来志向型の事業にもひるむことなく、取り組んでいく必要があるからです(門脇市長)

事業化が順調に進んでいる事業、結果はまだこれからという事業も含め、それでもここ数年、仙北市から発信されてきた未来志向型の各種取り組みは、先進的かつ魅力的なもの

が多い。

多様な特区プロジェクト・事業の現況

仙北市が実施してきた国家戦略特区(地方創生特区)の主な取り組み(特区プロジェクト)とその現況の概略はおよそ次の通りだ(参考資料「仙北市公式サイト・特区プロジェクトの進捗状況、他」)。

◇農業分野「農業法人多角化等促進事業/区域計画」事業者が農地法などの特例を活用し、新たな農業生産法人を設立。高機能農作物の生産・加工などを実施」

平成28年に有限会社グランビア(東京)が仙北市に進出。株式会社田沢湖自然ファームを

設立、田沢湖畔に欧風食堂kaedeをオープン(平成29年4月)。0.4haの耕作地でかぼちゃ栽培開始(同6月)。秋田県産・三元豚100頭の放牧開始(同7月)、国産生ハムフェスティバル開催(同9月)、生ハム加工開始(同12月)、以後、毎年11月に仕込み、翌年3月に出荷、他。

また株式会社メディカルファーム仙北は平成28年5月より休耕田約0.8haを活用、菊芋・大豆などの作付けを始め、今日に至る。

◇林業分野「国有林野活用促進事業/区域計画」事業者が田沢湖周辺地区の10haの国有林野を活用。森林空間を高度利用した生産方式を導入。森林の新たな価値創造および食産業の振興を図る」



ミシュラングリーンガイドにも登録の樺細工角館伝承館(角館)

前項・農業分野で進出した有有限会社グランビアが民有地で試験放牧(国産豚20頭、平成28年11月)の後、平成28年、同29年に放牧に適した国有林野の現地調査実施、他。

◇近未来技術分野「特定実験試験局制度に関する特例事業」/区域計画ⅡFPV Robotics株式会社が開催するドローンインパクトチャレンジアカップ2016の開催において、特定実験試験局制度の利用に関わる申請から免許発給までの手続きを大幅短縮。電波を活用した実証実験や技術開発などを促進する」



角館は「解体新書」の挿絵を描いた小田野直武の故郷(解体新書記念碑)

平成27年6月から各種準備を開始。大会開催前日(平成28年7月28日)にFPV Robotics株式会社が免許申請、即日で総務省が免許状を発給、同年7月29～31日の大会を開催。

◇旅行業分野「国家戦略特区特別区域旅行業務取扱管理者確保事業」/区域計画Ⅱ農家民宿を営む事業者などによる、地域資源を生かした「着地型旅行商品」の企画・提供促進のため、仙北市で地域の事情に即した旅行業務取扱管理者試験を実施」

平成29年6～7月に願書を取りまとめ、同年8月22～23日に国家戦略特区旅行業務取扱管理者研修を開催。修了試験に合格した12名が同年9月に国内旅行業務取扱管理者試験を受験し、同年10月に10名が合格。翌年1月に

地域限定旅行業の新規登録を果たす(登録団体Ⅱ仙北市農山村体験推進協議会)

◇特区関連事業「右の各分野の取り組みを促進するため、次のような各種の実証実験を実施」

ドローンと秘匿通信による図書輸送の実証実験(平成28年4月、西明寺小学校)西明寺中学校まで図書を輸送、株式会社プロドローン、無人運転バス公道実証実験(同年11月、株式会社ディー・エヌ・エー、内閣府)、角館空中さんぽ実証実験(平成29年5月、株式会社くまがい印刷、ドローンによる空撮映像で角館上空をバーチャル飛行)、AZAPA株式会社と株式会社リコーによる自動運転の共同実証実験(同年9月、自動運転の課題洗い出しのため実施)

◇仙北市独自の取り組み「右の各分野の取り組みを促進するため、仙北市が実施した主な取り組み」

仙北市指定ドローン飛行エリアの設定、ドローンの各種普及プログラムの実施、外国人医師の臨床修練制度の事前実証、近未来技術実証特区仙北市における事業創造計画の策定、他。

◇その他の取り組み「高年齢退職者就業促進事業」/高齢者をはじめとした雇用の安定などに関する法律の特例を活用し、高年齢退職者の就業の促進を図るための労働者派遣事業を行う↓雇用分野「NPO法人の設立手続きの迅速化」/区域計画Ⅱ新たな産業と雇用の創出に寄与し、社会起業の重要な担い手・NPO

法人の設立を促進するため、秋田県と連携し、設立認証手続きの申請書類の縦覧期間を2週間に短縮↓創業分野」他。

官民の共通認識が照らす 地域創生の道筋

課題山積の従来型の市政運営と併せて、このように仙北市では将来的な各種課題の解決のみならず、より多様な効果が見込まれる特区プロジェクトを、国家戦略特区指定の翌平成28年度以降、実に精力的に取り組んできた。さらにその延長線上の取り組みとして、昨年6月から、前述のように《SDGs未来都市》実現のための取り組みも新たに始まっている。

「17の多様な目標達成を図ることで、誰一人取り残さない《究極のユニバーサル社会》実現に向けた努力をする《SDGs未来都市》への取り組みは、特区プロジェクトの最大の目的である『市民がいつまでも暮らしたいと思えるようなまちづくり』、市外の方々からも『暮らしてみたいと思われるようなまちづくり』の実現に向けた努力と、方向性がそのまま重なってきます。

高齢化率が40%を超え、何もしなければ人口減少が止まらない仙北市のような都市が、持続可能なまちづくりを目指そうとする上では、規制緩和による地域資源の活用で地域課題の克服を図れる特区プロジェクトは心強い

味方です。その特区プロジェクトを包含しながら地域を活性化し、人にやさしく環境にもやさしい世界の構築を目指すまちづくり指針ともいえる《SDGs未来都市》を市民協働で実践することは、行政・市民・事業者の意識改革を、さらに促進する仕組みづくりにもつながると考えます」(門脇市長)

かつて田沢湖には固有種のクニマスがたくさん生息していたが、強酸性の玉川の水を産業振興のため流入させたため、戦前に死滅してしまった。しかし、田沢湖で生まれ、移植されていたクニマスの卵から生まれた子孫が山梨県・西湖から発見されたことで、現在、仙北市では「田沢湖再生クニマス里帰りプロジェクト」が実施されている。



神秘的な雰囲気の人気田沢湖の深さは日本一

このプロジェクトはまだ途上だが、消えたと思われていたかつての地域資源が再びよみがえろうとしている事実は、非常に興味深い。そして日本一の深さを誇る田沢湖は、見る角度により光の屈折などの関係で色合いが目まぐるしく変わるとされる。この現象は仙北市の今ある地域資源の多様性を象徴しているかのようで、とても面白い。

規制緩和を呼び水に、既にある地域資源やよみがえりつつある地域資源、新たに創造されようとしている地域資源が、混然一体となつて進められつつある仙北市の地域創生。その現況および過程は日本の近未来の縮図にも見えてくる。

(取材・文：遠藤隆／取材日令和元年7月17日)



田沢湖畔「田沢湖クニマス未来館」はクニマス再生の拠点